

教養コース 1 文学講座

# ～紫式部の生涯と和歌

## 「みやび」と「あわれ」～

講師：谷地 快一氏 (たにちよしかず)

東洋大学名誉教授



## 第一回講座

日時 9月1日(日)午前10時～正午  
場所 みずほ台コミュニティセンター  
参加 32名

## はじめに

令和六年（二〇二四）の大河ドラマ（NHK）は紫式部を取り上げるという。そこで今年は彼女の生きた時代や著作を取り上げられないかという相談を受けた。守備範囲外のことではあるが、大学の学部と大学院を通して源氏学の石田穰二先生の講筵に連なり、後に同じ職場の同僚として親しくしていただいた御恩がある。それにすがる、「概説ならば」という条件で、「紫式部の生涯と和歌」、あるいは「和歌で読み解く源氏物語」という二案を示して前者が支持された。ちなみに、副題の「みやび」は宮廷風な優美、「あわれ」は喜び・悲しみ・驚きなどが心の底からわき起こる際の感動詞で、漢字「嗚呼」に相当。

## 第一講「紫式部の時代」の概要

第一講「紫式部の時代」では「木を見て森を見ず」という結果を招かないために、まず「この国はどのようにして生まれたか」、つまり王朝（平安時代）の前史を概説した。

わが国の歴史は長い縄文（狩猟）と弥生（水稻耕作）時代を経て、西洋暦が始まるころには中国と深く関わり、奴王（倭国王）が後漢（洛陽）に、卑弥呼（邪馬台国女王）が魏（洛陽）へ朝貢（『後漢書』）。続く隋王朝（長安）や唐王朝（長安）に使節団を送って大陸文化を吸収したが、九世紀末に菅原道真の建議で停止。それは唐風文化から国風文化への転換期で、紫式部を始めとする宮廷の女流文学誕生へと道をひらく。

一方、朝鮮半島は七世紀なかばに、高句麗・百済・新羅三国のうち百済滅亡。その結果、数百年に及ぶ百済からの渡来人は我が国の広範囲に定住し、彼等を支える氏族と手を組んで新しい国家建設をめざす。皇室の祖先が天孫降臨まで遡り、神格を備えているという理不尽な主張は、不意に割り込んできた渡来人を天子に据えて、新しい国造りをするには好都合な幻想であった。かつてはそれが正史と扱われたが（『日本書紀』）、今は史実でなく物語の領域として日本文学史のはじめに置かれる。これは冷徹なる真実である。

紫式部を含む藤原氏は初め中臣氏。鎌足の時に出生地（大和国高市郡藤原）にちなんで、中大兄皇子、すなわち天智天皇（第三八代）から藤原姓を賜る。忌部氏などと同様に祭祀（神事・祖霊信仰）に携わる古代氏族の一つで、新しい国造りに寄与して皇室に深く関わり、天皇の外戚として摂政・関白という権力をほしいままにした。

## 第二回講座

日時 9月8日(日) 午前10時～正午  
場所 みずほ台コミュニティセンター  
参加 33名

### 第二講「紫式部の生涯」の概要

紫式部は山城国北部（京都）に都を置く平安時代の人。ここに都が来るまでの皇室の住居を大まかな時系列で示せば、百済大井宮（奈良）・飛鳥板蓋宮（奈良）・難波長柄豊崎宮（大阪）・飛鳥宮（奈良）・近江大津宮（滋賀）・飛鳥浄御原宮（奈良）と続く。そして、中国は隋・唐の首都長安（西安）を手本とする最初の藤原京（橿原）の造営があり、この藤原京を模した平城京（奈良）へと遷都した。それ以後、大養徳恭仁大宮（加茂）・紫香楽宮（滋賀）などの離宮を経て平城京（奈良）へと戻り、長岡京（京都）へと転じて、長安に倣った三度目の平安京を築くのは西暦七九四年、百済大井宮から実に二二〇年以上が経過。これは宮（神のいる御殿）から朝廷（天子が政治を執りおこなう機関）へと格式を整える歴史であり、政争・権謀術数に明け暮れた時間とみて誤るまい。

平安時代は一般に四期に分ける。すなわち、第一期は『万葉集』の伝統が一時途絶えた唐風全盛期。第二期は平仮名片仮名の創案で『万葉集』が見直された和歌の時代で、最初の勅撰集『古今和歌集』が編まれる。『土佐日記』『蜻蛉日記』、『竹取物語』『伊勢物語』などが書かれた国風文化の成熟期。第三期は摂関家（天皇に代わって政務を執行補佐する重職）を独占する藤原北家（四家の一）が権力を行使。具体的には藤原兼家と嫡男道隆、五男道長（甥の伊周・隆家を失脚させ、五人の娘を入内させて外戚となる）のような大権力者が出現した時代。これは後宮（平安京内裏の奥御殿。天皇の住む仁寿殿後方の五舎）の女房（女官）の地位を高め、中宮定子に仕えて随筆『枕草子』の著者である清少納言や、中宮彰子に仕えて『源氏物語』を遺した紫式部ら才女を登場させた。なお、第四期は摂関家が力を失い、上皇や法皇が天皇に代わって政務を決済する院政期（白河・鳥羽・後白河・後鳥羽）を迎えるが、それは新興武士勢力にとってかわる時代でもある。

さて『紫式部日記』（以下『日記』と略す）は一〇〇八年初秋から一〇年正月に至る宮仕え体験と印象を綴る。当時の一条天皇は七歳で即位。摂関家は十一歳の天皇に三歳年長の定子（藤原兼家の長男道隆の娘）を入内させて中宮としたが、その父道隆が病没すると、道隆の弟道長が娘彰子を入内させ、定子を皇后に、彰子を中宮にする二后冊立を敢行、定子に仕える清少納言、彰子に仕える紫式部という構図を生んだ。『日記』は土御門殿（道長邸）における敦成親王（後一条天皇）誕生の印象記を主眼とし、合わせて和泉式部・赤染衛門・清少納言などへの批評と内省を試みる。

## 第3回講座

日時 9月15日(日)午前10時～正午  
場所 みずほ台コミュニティセンター  
参加 27名

### 第三講「紫式部と日記」の概要

以下、全三回にわたり、『日記』の主だった内容を紹介する。本書は中宮彰子の出産の記録が中心ゆえ、それを二回にわたって読み、三回目（最終回）は書簡ふうな、私的な文章を紹介する。本文は山本利達校注『紫式部日記・紫式部集』（新潮日本古典集成、昭和五五・二）に従った。

冒頭は彰子（二十一歳）が一〇〇八年七月以降、お産のために宮廷から土御門殿（仙洞御所北側。父藤原道長の邸）に退出していた時の話。道長邸の初秋の風情から起筆し、お産を前にした彰子の立派な心構えを称え、彰子に仕える中で憂き世を嘆いてきた自分の心がはれてゆくという話。

次に八月二十六日の薫き物（練り香）調合のおすそわけに集う女房たちと、宰相の君（道綱の娘豊子。中宮の従姉で上臈女房。やがて生まれる皇子の乳母）の昼寝姿をのぞき見て、その美しさを、重ね着の着衣のさまとともに紹介。なお、薫き物は神前・仏前を清めることに始まり、部屋・身体・着物などの異臭を消す目的で用い、その優劣を競った。

続いて、九月九日（重陽）。彰子の母倫子から菊の被せ綿をもらう話を紹介。〈特別に、この被せ綿をあげるから、念を入れて老いをぬぐい取りなさい〉という倫子の伝言を喜びつつも、もったいなくて、次の歌をわたそうとした話。

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ（日記・紫式部集）  
歌意は〈いただいた菊の露は少し若くなるほどに袖をふれさせていただき、千年の寿命は菊の花のあるじである奥さま（倫子）におゆずりいたします〉。これは菊の葉の下露を吸って不老不死の仙人になった中国の故事による（謡曲『菊慈童』）。日本でも重陽の前夜に菊の花に真綿をかぶせて霜除けとし、香りと露を移した綿で身を拭い延命祈願とした。

次は九月十日。物の怪調伏と、近くに仕える女房たちの話。彰子出産を前に用意された御帳台（寝所）。物の怪を憑人に追い移して調伏しようとする修験者（天台・真言の加持祈祷師で、役小角の呪法を継ぐ）や陰陽師（吉凶を占う陰陽寮役人で、中臣の祭文・祝詞を担当）、さらには高僧の祈祷（安産祈願の読経）のさまを描き、泣き声をひそめて心配する女房たちのさまを描く。実在しない物の怪を創造し、護摩を焚き呪文を唱える修験や仏道を取り込んだ藤原（中臣）氏の神道がかいま見られる。



## 第4回講座

日時 9月22日(日)午前10時～正午  
場所 みずほ台コミュニティセンター  
参加 29名

### 第四講「紫式部の宮仕え」の概要

まず若宮（敦成）の誕生と伺候する女房のさまを描く。すなわち、彰子は産気づくが、加持祈祷の甲斐なく一昼夜が経過。そこで、彰子は仏の功德にすがって、受戒（仏の定めた戒律を受ける儀式）。女房たちの不安とおののきの中で若宮誕生。憑人の口を通して、お産を妨げられなかった物の怪の悔しさ、それを退ける阿闍梨や律師の祈祷を描く。

次に若宮（敦成）誕生後の七日間の様子。しきたりによって装束や調度類を白一色に統一する女房たち。その制約下で工夫を凝らして着飾るさまが描かれる。

続いて、若宮（敦成）との対面を目的とする行幸（一条天皇）。天皇を船楽でもてなすため、新造の龍頭鷁首を見聞する道長、御輿を迎える上達部や女房たちの衣裳の詳細、行幸に伴う三種の神器のこと、神輿の到着と儀式のオシャレなどの詳述。ちなみに、龍頭鷁首は園遊などで池に浮かべる二艘の舟。龍（ウロコのある動物の長）も鷁（鶉に似た大鳥）も想像上の獣で瑞祥。龍頭は唐楽の楽人が乗る船首に飾り、鷁首は高麗楽の楽人が乗る船首に飾るといふ。

以下、時間切れで意を尽くせなかった数章を要約すれば以下の通り。

若宮の五十日の祝い。これは誕生して五十日目には赤子の口に餅をふくませる儀式で、朝廷や公卿において行われた。そこに伺候する一族にまじって、すでに『源氏物語』を読んでいたらしい藤原公任（従二位中納言。当時歌壇の第一人者）と紫式部の接触が描かれる。

十一月二十日の五節の行事について。これは清涼殿に殿上人を召して行われる酒宴の話。いわゆる豊明節会で、新穀を食し、またほどこしたりした。

その五節の行事の一つに、清涼殿に五節の舞姫に付き添う童女と下仕えの女房を召して、顔を隠している扇を下に置かせ、天皇が御覧になる儀式が描かれ、人前にさらされる童女たちを気の毒に思う紫式部の心中を吐露している。

なお、和泉式部や清少納言に対する批評の前に、紫式部の弟（藤原惟規）の恋人評がある。すなわち、中将の君（斎院に仕える女房）で、弟が彼女の手紙をこっそり姉の紫式部に見せてくれた、その感想である。内容はその女房の気取った様子、思慮や感受性のなさを徹底的にこき下ろすもの。ちなみに、斎院は賀茂神社に仕える未婚の内親王（天皇の姉妹・皇女）で、ここは村上帝天皇皇女である選子を指す。

## 第五回講座

日時 9月29日(日)午前10時～正午  
場所 みずほ台コミュニティセンター  
参加 31名

### 第五講「紫式部の人物評」の概要

初めに、和泉式部（生没年未詳）について。〈気品のある歌人ではない〉と評しつつ、〈正直な情熱の吐露に特色がある〉と評する。中古三十六歌仙。父は大江雅致（越前守）。和泉守橘道貞と結婚、小式部内侍は娘。為尊・敦道（共に外祖父兼家）両親王との恋、藤原保昌と再婚などで知られる。『後拾遺集』の六十七首は最多入集。

第二に、赤染衛門（生没年未詳）について。〈品格があって、彰子に仕える女房の中で第一の歌人〉と評する。中古三十六歌仙。父は赤染時用。実は平兼盛の娘という（藤原清輔『袋草紙』）。夫は漢学者・歌人の大江匡衡。道長の栄華を描く『栄花物語』正編は彼女の著作という。

最後に、清少納言（生没年未詳）について。〈賢そうにふるまって、鼻持ちならない〉とともに、〈漢学の才をひけらかすものの不十分である、つまり軽薄〉と評す。一条天皇の中宮定子へ愛情は深く、定子の豊かな教養や人柄は『枕草子』に如実。それゆえに風当たりも強く、それは定子没後まで続く。紫式部に清少納言に対する対抗意識が生まれるのは自然のなりゆきであったと思われる。中古三十六歌仙。父は清原元輔。

続いて、紫式部自身の性格に言及。『源氏物語』の作者ゆえに周囲からは警戒されたこと。宮仕えでは、常に周囲に気を配り、争いを避けて、周囲から〈ボケて、愚かな女〉と思われるほどに自己演出し、人間関係に気を張りながら生きたことがうかがえる内容。しかし、女の生き方については、好みや考え方、感じ方に偏りのない人に好意を示す一方で、嫌がらせには相応の態度をとる。これらに自己を律する意思の強さが見える。

漢学の素養と中傷に対する紫式部の振る舞いを紹介して結びとする。

女に漢籍を学ぶ必要はなく、正式に学ぶこともない時代である。彼女は漢学者の父に学んで、男に生まれなかったことを惜まれるほどに優秀。その教養は『源氏物語』執筆において発揮され、一条天皇に称賛された。その学問をひけらかすことはなかったが、左衛門の内侍（内裏の女房。未詳）に悪意をもって言いふらされた。その辛い思いを書き留めながら、権力と威勢がもたらす派手な宮廷つとめになじめない一面を見せつつ、観察者である自分の履歴や性格を振り返っている。 《畢》



報告 出井 あや子